

家族ならではの情報を センター方式を活用してケアに活かした例

有)ハートフルケアサービス
介護支援専門員
長澤 かほる

**手先が器用な母で、
何か作るのが好きだし得意だったんです。**

**記念に持って帰れる作品を、
ディケアで作れたらいいのに…。**

■ 98歳 女性 ■ 要介護3

■ 介護者は別棟に住む長女

サービス担当者会議を 開いて検討してみたものの…。

- ①ディケア（通所リハビリ）では、
個別メニューを提供できない。
- ②ディケアで体を動かしているから、
自宅離れの浴室に移動できる。
- ③だから、ディサービスに変更できない。
- ④だけど、ディサービスを
追加することも体力的に難しい。

そのような条件の中での結論は…。

ヘルパーさんの訪問時に、 自宅で手作業に取り組んでみよう！

- ・ ご本人はどんなことが得意だったのか？
- ・ どんな「暮らし方」をしてきたのか？などなど....。
- ・ これから、ヘルパーさんがご本人と
じっくり関わっていくためにも....。
- ・ 知っておきたいことがいろいろありました。

そこで、長女に....。

B-3:暮らしの情報(私の暮らし方)シートを

1枚書いていただくお願いをしました。

「おかあさんの今までの生活の様子が知りたい。

ヘルパーさんと何ができるか考える参考にするため、

1週間くらいの間で書いていただけませんか？

書けたら連絡を下さい。取りに行きます。」と手渡しをした。



驚くことに1時間後にはしっかり記載されたシートが届けられました！

「かけられる時間はいつでも同じ。

早く書かないと渡すの忘れちゃうから。」（後日談）

■ 現在やっていること

何か作るという目標のためにも今、集中して「遊べる」
ことに取り組んでいます。

①競う遊びが好き。

②ヘルパーさんには負けられない！

お手玉、文字並べ、神経衰弱…。

③頭と手を使って…。

■ 驚きの変化

- ① 5分で忘れしまうことばかりなのに、
「誰かが遊んでくれた」と覚えていた。
- ② お風呂の後は疲れるから、先にやりたい！
という気持ちになった。

■ ケアマネからのひとこと

家族しかわからない情報があることを家族が知り、書ける力があればシートに記入し、プロに渡せる。

その情報を手掛かりに、さらに家族と共にプロも力を発揮する。

プロの姿勢を家族に提示することは、家族の安心にもつながる。これが大切なこと。

たとえ小さな楽しみ、喜びであっても、認知症高齢者にとってそれがどれほどの大きなものになるかは決して過小評価しない。これも大切なこと。